金澤　成保　様

御発言配付資料

〔発言テーマ〕

誇りある個性と「豊かさ」のある「まちづくり」を

2017.10.2（仮称）岐阜市未来ビジョン　第３回有識者会議

誇りある個性と「豊かさ」のある「まちづくり」を

大阪産業大学 金澤成保

地域の振興には「交流人口」の拡大も

- 日本は人口減社会にすでに移っており、2060年には、9000万人を下まわると予測されています。経済のみならず社会や行政に与える影響は大きく、これまで前提としてきた考え方を大きく転換せざるをえなくなっています
- 人口減少は、なにより地方で著しく、これからは定住者のみならず観光・ビジネス、教育・学術・芸術などの地域交流に訪れる人々「交流人口」にも重点を置き地域づくりをすすめていく必要がある と考えます

人も地域も個性と創造性を

- ２０世紀では、モノの豊かさと利便性の拡大が最大多数の人々に幸福をもたらすと、考えてきました。大量生産・大量消費のため、同様な価値観を共有することが求められ、製品やサービスのみならず人や地域までも、「規格・標準化」がすすめられた時代だといえます
- ２１世紀は、日本をはじめとする先進国で、多品種・高付加価値・少量生産へ重心が移っており、「規格・標準化」にとらわれない個性と独創性が、人にも地域にも求められる時代になりつつあります
- 地方中核都市：岐阜市は、「都会性」と地方の暮らしの「豊かさ」を同時にもつ都市に

機能の分離から近接・融合へ

- 近代の都市計画では、住居、工業、商業などの都市機能の「分離」配置と交通インフラの整備が基本におかれました
- 人々の暮らしを「住まう」「働く」「遊ぶ」に大きくわけると、古くはこれらが住まいとその周囲に未分化のまま重ね合っていましたが、近代に入るとそれらが分離配置、遠隔化され、その間をむすぶ交通増大への対応で追われるようになりました
- ２１世紀は、人口減社会になることもあり、「住まう」「働く」「遊ぶ」の暮らしを、よりコンパクトな既存の地域に近接・融合させた“まちづくり”をすすめていくことが求められます

環境共生で持続可能なまちづくりを

- 石油をはじめとする資源の限界がより明らかになり、温暖化や自然災害の激甚化をはじめ地球規模で広がる環境問題が年々深刻化するようになってきました
- 　こうした中で、省エネや資源の再生・循環利用、太陽エネルギーや風力などの自然エネルギーの活用、自然素材を用いた建築の推進など、環境共生のまちづくり、「コンパクトシティ」をすすめることで、これからの世代も引きつづき健全な暮らしができる持続可能な社会をつくることが、求められています

情報化とモビリティ拡大の活用を

- 情報社会への移行が急速に進展し、パーソナル・コンピューター、さらにスマホなどの普及により、個人が常時ネットワークを通じて、社会や世界と瞬時に情報交換ができるようになりました
- フェースブックなどのソーシャル・ネットワーキング・サービスの爆発的普及により、個人の間のみならず個人と企業、行政などとの情報ネットワークが加速度的に増殖・相互リンクし、商品・サービスの購買、施設の利用や、飲食、観光地の選択などに、個人や企業、公的機関から発信される情報が、大きな影響力をもつ時代になってきました
- 多様な交通手段の選択と利用が便利になり、人々のモビリティすなわち移動性は、増大し国を超えて広域化しつづけています（その条件に平和があります）。居住地・職業選択の流動化や多様化もすすみつつあります。こうした技術革新によってもたらされる社会と暮らしの変革を、大都市の後追いではなく、地方都市はみずからが地域振興のチャンスとしてとらえて、地域づくりに取り組んでほしいと想います

「縮減」社会に対応した安全で「ゆとり」のある「まちづくり」の推進を

- **土地・建物の余剰化を活かして、自立した持続可能な生活環境の構築**
- 派生する空き地・空家を、住宅敷地の拡大、週末住宅としての活用、市民菜園等市民利用に
- 太陽等自然エネルギーの活用、雨水・生活排水の再利用を進め、自立・自存できるコミュニティーづくりを
- **防災を、「封じ込め型」から「緩和・復興型」に**
- 土地の余剰を活かし、河川沿い、浸水危険地域に遊水地を広げていく、崖崩れ・土砂災害危険地域からの住宅移転をすすめていく
- **施設の統廃合、「複能化」と再利用の推進を**
- 所管を超えた複合機能の施設の展開（ex.幼児教育と高齢者福祉、みんなの森）

地方都市ならではの「豊かさ」、「ゆとり」と「きずな」を追求する

- これまでの豊かさとは、あふれる商品や食べ物などの「モノの豊富さ」と、移動や交通などの「便利さ」として、とらえられてきたのではないでしょうか。これら２つにくわえて、「ゆとり」と「きずな」も真の「豊かさ」を成り立たせる暮らしの重要な側面であると想います。すなわち、
- **「豊かさ」＝「モノの豊富さ」と「便利さ」＋「ゆとり」と「きずな」**となります。「ゆとり」は、時間と空間と心のゆとり、「きずな」は、人と人、人と地域・環境、過去の歴史・伝統との絆です。
- 戦後の日本、とくに大都市は、「モノの豊富さ」と「便利さ」を追い求め、「ゆとり」と「きずな」を犠牲にして、ありあまるほどの「モノの豊富さ」と「便利さ」を得ることができたと見ています。地方都市は、なお「ゆとり」と「きずな」をもちつづけており、それらを今後も育てていく暮らしのデザインをすすめ、真の「豊かさ」を実感できる社会を創りだすことが望まれると想います

“郡”の居直り、田舎の誇りを

- 地方都市が、大都市にくらべ「モノの豊かさ」や「便利さ」に劣ることを引け目に感じて後追いし、東京などの例やアイデアを取り入れるばかりでは、その特色や個性を埋没させることにもなります
- 自然や産物の豊かさ、田園や空の広がり、農業や伝統産業、「ゆとり」や「きずな」に根ざした暮らしなど、地方だからこそ見いだすことのできる特色を地域の個性と魅力としてとらえ、地域づくりに取り組むことが、「交流人口」をひきつけることにもつながり、これからますます求められてくると想います

地域交流拡大のアイデアを

- 伝統的な生活文化を現代に生かす商品開発の推進（例：石見銀山群言堂）
- 都会の人々の「第二の故郷」事業の展開（休暇期の滞在優遇、小学生の留学・遠隔授業、尾張藩領であったことから、とくに名古屋市民に対して）
- サイクリングで日本の原風景を楽しむ里山・田園ツアー
- 信長ゆかりの都市・地域との「信長サミット」の実施、斎藤道三のクローズアップ
- 周辺観光地との連携・「サムライルート」との連携強化と他の観光ルートの開発
- 岐阜市のの写真・動画・作文・詩歌コンクールの展開
- 芸術家・作家の滞在・居住・活動の奨励
- 「五感」で感じる環境づくりを（視覚のみならず、匂い、音、味、触感、寒暖の変化）
- 「健康」をテーマとした食とイベントの展開
- LEDを活用した照明の演出と展開、プロジェクションマッピングの導入
- 観光ガイド・ボランティアの展開と匠など地元の「人」との出会いを

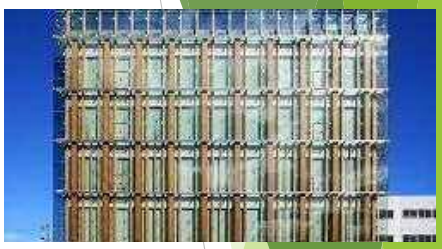
「ウッドファースト」、“木のまちづくり”の先導役に

- わが国にあっては、森と木を活かすことが、これからの地域創生の第一の柱となると、考えています。人口減はとくに山間僻地で著しく、林業・山間部の衰えは、自然災害、そして平野部の農業や海の漁業に衰退も招きます
- 建築関連技術の進歩により、木造建築物の難燃・耐震化・高層化が可能となり、近年、低層住宅にとどまらず、中高層のオフィス・ビル、学校、文化施設、役所、銀行なども現代的なデザインで建てられるようになってきました
- 建物の新築にとどまらず、既存建物のリニューアルに、内装・インテリアのリフォームに木をつかう、そのことにより国産木材の需要を開拓し、大工や木工の伝統技術が継承・発展していくことが、これからの日本に求められていくのではないでしょうか

「ウッドファースト」は始まっている！

大阪木材仲買会館

みんなの森



丸美産業本社

人が主人公となる道空間を

- 日本では、人よりも車を優先するまちづくりがおこなわれてきました（歩道橋がわが物顔の国は、日本だけです。欧米都市では歩行者優先のまちづくりに大きくシフトしています）。車交通の規制・抑制は、地域の利便と発展に妨げとなると反対もされてきましたが、歩行者が増えることで地域の商業が潤うことを、多くの事例が示しています
- 都心部や観光地への車交通の規制、歩行者優先あるいは「歩車共存」道路の導入、歩行者天国あるいは歩行者専用道路の実施などにより、歩行者空間のネットワーク化をすすめ、その節々に小公園・広場などを創ることで、街の中を、安心して楽しく歩けるようにする

「場所性」を見出し、人と場所の「きずな」を築く

- 場所を無機的・観念的・抽象的な「空間」として捉えるのではなく、固有の「場所」として捉える
- その場所の特色、歴史と文化（履歴、思い出、記憶、事件、象徴性、意味）を掘り起こす
- 詩歌、小説、映画、アニメで描かれた場所を顕彰する
- 単に建物、施設、道として捉えるばかりでなく、人の関わりの重なる「場所」として捉える
- その地区、通り、住み手たちの歴史と文化を顕彰する石碑、画像などを景観づくりに活かす
- その場所を顕彰する案内板、道路舗装・建物外壁埋め込みタイルなどを設置する
- 現代アートを持ち込む

ヒト、モノ、コトの総合的デザインへ

- これからの地方都市のデザインには、人々の暮らしの“器”である建物や街並み、道や公園などの公共空間の、いわば「モノ」のデザインにとどまらず、
- 暮らしの“中身”である「ヒト」、地域の人々と社会や産業、さらにイベント・行事などの、いわば「コト」のデザインも必要で、それらを都市の将来像の実現に向け連動・連携させていくことで、地域の振興と創生をはかっていくことが、望まれていると思います

- （おわり）